

第十四節 世界一般の世界性の理念

世界とは？

- 「世界」は皆当たり前知っていると思い込んでいた。それゆえにこれを現象として説明することは今までされてこなかった。「世界」を記述するのは、その中に現れてくる「存在者」を見えるようにするためなのだが、その第一歩は「世界の 中にあるもの」を列挙することである。

①自然物からのアプローチ：結局材料としての自然にしか出会わない。

②人工物からのアプローチ：人工物も確かに我々の手元にあり、世界をより示すだろうが、世界の中にある一存在者にすぎない。

- どの存在者から「世界に」にアプローチするにせよ「世界」は前提されている。もしかすると「世界」は現存在の主観的なものなのかもしれない。だとしたら共同の世界とはどうして可能なのか。世界一般の世界性を探究こそが目指すべきところではないか。

- 「世界性」は存在論的概念ではあるが現存在が実存論的規定であるため、やはり一つの実存範疇である。存在論的に見れば「世界」は現存在の一つの性格である。

- 「世界」という言葉が持つ様々な諸現象

- 存在論的概念、存在者の総体
- 「多様な存在者を包容する領域の世界」
- 事実的な存在者がある中で生活している「ところ」
- 世界性一般というアプリアリな原理を含む世界
- これまでの存在論は発見もされていない存在者、つまり自然を基にして世界を解釈しようとしてきた。我々は最もみじかなあり方である日常的な世界の内=存在を追跡することで世界を目撃しようとしている。
- 環境世界が最も日常的現存在に近い世界である。環境という言葉の中には「まわり」という意味が含まれていて、これが空間を示唆している。これまでの存在論はこれとは反対に「世界」の存在をres extensa¹として解釈しようとしてきた。この極地にいるのがデカルトである。

¹「情念論」に登場する心と身体二元論の身体に相当する。場所を持つことがres extensaの本性だとされる。